

# ノーサイド

## 禍害と被害を超えた論理の構築

### ( 5 )

#### ～混乱からの脱出～

## 中村周平

今回は、入院中にあったラグビー部の指導陣や学校側とのやりとり、退院して在宅での生活に移行していくところについて触れていきたいと思います。入院していた当時、私は自分が負った障害のことで精神的にかなり余裕のない状態でした。それでも、事故についてはしっかりと原因を把握してくれているものだと思っていました。しかし、時間が経つにつれ様々なことが明らかになっていきます。また、現代医療の限界を痛感した両親は、在宅での生活を模索していくことに。それは、徐々にではありましたが、事故後の混乱から抜け出していっていることを意味していました。

前回までと同様に、「私へのインタビュー」、「両親へのインタビュー」も引用しつつ、当時の私や両親の心境について書き出していきたいと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュアー)=I、父親=T、母親=Hとする。

### 1 監督からの突然の知らせ

「あと、どんだけこんな日が続くのかな、いつ退院できるかも分からない不安だらけの日々を送っていた中、病院に見舞いに来てくださった監督の口か

ら、突然、私の首の上に乗ったかもしれない部員の名前が告げられました。

S:「最初は、事故が起こってすぐはそれ(事故のこと)どころじゃなかった。(中略)2月ですね。監督の方から...病室に突然来はって。(中略)病室に来はった時に僕は何も聞いてないのに『お前の首の乗ったのは〇〇やねん。でも許したってくれよ』ってパツと言わはって。僕自身もそれまで知らなかったので『あー、あいつやったんか』っていうのと、体も大きかったので『あんなけ大きい子がのってしまったんやったら、こんなに大きな怪我につながるかな』っていう気持ちもありました。逆に監督が『許したってくれよ』って言ったときに、自分の中ではその子を責めるつもりは、その時からまったくなくて...もし、自分が逆やったらこれはしんどいやるなって。彼もその時乗ったことは自覚してるやるなって、これ逆やったら絶対キツイなって思ったんです」

I:「なるほど、うん」

S:「全然恨んでませんっていうことは監督に伝えて、その時はそれで終わったんですよ」

あのグラウンドにいた30人の部員誰もが、怪我を

する可能性があったし、誰かに怪我をさせる可能性もありました。事故の直接の被害に遭ったのが偶然、私であったというだけで、もし逆の立場だったら本当にどうしようもない気持ちに立たされていたのではないかと...そのことを考えたら、怪我をさせてしまった部員も、今辛い思いをしているのではないかと思っていました。

## 2 入院生活後期

### 1) 現代の医療に対する反発

募る不安を和らげてくれたのは、少しでも回復に向かって努力していこうと、気持ちを前向きにさせてくれる方々との出会いでした。事故後 1 ヶ月目に病室を訪れてくださったのは鍼灸師の方でした。両親は私の事故が起きる以前から、洛西近辺の中学校でラグビーによる大きな事故が起きていたことを耳にしていました。「そのご家族と会えるのであれば、ぜひとも会わせてほしい」。監督にお願いしたところ、すぐに会わせてもらえることになりました。実際にお会いすることができたのはご両親で、事故やりハビリのことなど、私の両親がこれまでなかなか聞くことができなかつたことを教えていただくことができました。その話の中で「是非訪ねなさい」と勧めてくださったのが、その鍼灸師の方でした。治療をお願いした当初、「治療は 1 年や 2 年で終わるものではないから...」と、この治療を施していく責任の重大性から断るつもりだったそうです。しかし、自分たちの周りの本当に多くの方々が直接治療をお願いして下さった結果、受けてくださることになりました。

また、遠く北の大地から発信された情報も、私を大変勇気づけてくれるものでした。私の事故から遡ること 9 年前、自転車の転倒である女性が頸髄を損傷する事故に遭われ、一時は、瞬きと自発呼吸しかできない状態にまで陥りました。しかし、以前から家族ぐるみで交流のあった男性の独学によるトレーニングと周囲の方々の支えによって、松葉杖で歩くまでに回復されました。その男性が数年後、事故の経緯やトレーニングについて詳細に記録したものをネット上に配信。「医師からは『もう歩けない』と宣

告されたのになぜ?」「どんなトレーニングをしたの?」その情報を知った同じ障害を抱える人達から数えきれないほどの連絡があり、また同時にその情報も全国に広まっていきました。

I: 「退院するときは、自分の体、動かへんという認識はあったん?」

S: 「そこはイレギュラーというか、他の人やったら、受容があって、残存の機能を使ったりハビリをすると思うんですけど。鍼の先生が事故後一ヶ月後から病室にはいって治療していただいていた...」

I: 「自分の入院してる、なるほど」

S: 「あと、北海道の方ですよ、この間の授業の時話してた。自転車事故で首やらはった女性の方を松葉杖で歩くところまで回復させた方がいはるんですけど、その人のところに親がコンタクトをとっていたので、(中略)こういう人もいるからあきらめたらあかんっていうのは親からも伝えられたし、いろんな情報ももらったりとか、鍼の先生も以前治療してはった人が立って歩くところまで回復させた方もいるっていう話もしてくれてはったんで」

事故後、ネット上で偶然その情報を知ったコーチがすぐにその男性に連絡し、つながることができました。その翌日には監督が数百枚にも渡る「事故の経緯やトレーニングについて詳細に記録したものを印刷し、病室に持ってきてくれました。「自分以外にも頑張っている人がいる」、その人たちの存在が漠然とした障害に対する不安を打ち消してくれました。

そして何より、現状を受け入れることに大きな抵抗がありました。

S: 「なんかそこまでいなくても、このまま終わりたいくないっていう気持ちが。思い描いていた「立って歩く」っていうのは、「元に戻る」っていうのは難しいかもしれないけど、ちょっとでも自分ができることを...自分の気持ちに正直になったら、今の病院のリハビリとか、今の現状を受け入れなくなかったというか、それに対する反骨心というか。医者があかんといつたから、今の医学が回復できへんというから、じゃあ全部諦めてしまおうかなっていうときに、諦

めたくなかったというか、なにかあるなら、それに頼っていったってちょっとでも自分の体が少しでも動けばいいなって」

I:「という、退院するときはそういう気持ちを持ってたわけや？」

S:「今でこそ、はっきり言えるけど、当時は医療に対する反骨心で動いてた気がしますね」

「最初から何もかも諦めてしまうのではなく、少しでも機能回復を、自分のできることを増やしていきたい。壮大過ぎるかもしれないが立って歩くことを最終の目標にしていました。どこまで回復するかわからないという不安は常にありましたが、現状の医療に対する反骨心が当時の原動力でした。

しかし、その思いが強すぎたことで「今自分にできること」であっても、ネガティブに感じるものは拒否してしまうということも起きてしまっていました。病院で「顎で操作する電動車いすに一度乗って見ないか」と、リハビリの先生方に勧められたときのことです。

S:「医療に対する反骨心の延長線上で、そのころとか、顎で使う電動のやつ(車いす)は使えたんですね。病院からもそれすすめられて...そこでそれを使ってしまったら、自分の中でそこで OK みたいな。本来なら間違った考え方やと思うんですけど、当時はなんかこんなすぐ使えるし、またほんまに必要なった時でいいし、それまでは、使いたくないと思ったんですね」

I:「そこらへんが偉いわ」

S:「もっと手で操作する電動が使えたり、自分でこげる車いすが使えるようにとか、もっと回復しているなら車いすとか使いたくなかったという思いがあり、自分で動けるものには頼りたくなかった。今思えば、自分でできることをしていかなかったとも言えるんですけど」

I:「その、ある種、自分の未来や自分の体に対して、ある意味期待もあったわけや？」

S:「そうですね」

当時、移動の際は常に誰かに押してもらわなければならない「介助式」の車いすに乗っていたため、「少

しでも動く部分を使って自分のできることを増やして欲しい」というリハビリの先生方の思いからだったと思います。事実、顎で操作する電動車いすであれば自分の行きたい時に行きたい方向に動くことができました。しかし、当時の自分はそれでは現状に満足してしまい「機能回復」への気持ちが薄れていくような気がしてなりません。結局、電動車いすの訓練は一度だけで打ち切ってしまいました。

そして、手術前におこなわれた主治医からの宣告を、両親は私に伝えようとはしませんでした。

S:「リハビリとか機能回復についてはどう思った？」

(中略)

H:「医者からは回復の可能性はないって言われたやんか。でも今、回復してる人らでも、みんなそう言われてる、その中にも回復している例がある。そう言われても、回復しなくて、医者の言われた通り、そういう道をたどっている人が圧倒的に多いやんか。回復している人に共通しているのは、医者の言われた通りではなく、可能性にかけてとりあえず、体を動かし続ける、常に刺激を与え続ける。そのこと繰り返すなかで、今の医学の常識とかよりかは、回復してはるといふ事実もいくつか知ることができたから、その可能性にかけようと思ってるし。そういう人達がいるということは否定できないから周平がそうならないとは絶対に言い切れない。いつか、回復した人みたいになれたらいいよねっていう思いは常にあったし。今できること、いいって言われてることはなんでもしたい。あとで、あの時こうしてたらよかったのっていう悔いは残したくないなって。だから、そのことについて、協力してくれた、高校の先生も交替でストレッチをしに来てくれたり、友達に来てくれたりとか。一日の中で、なんども刺激を与えられるように、鍼の先生が来てくれるようになってからも、その先生がいない時間にできることを教えてもらったり(中略)ちょっとでも早い時期から、そういう刺激が与えられることはいいことやと思ってたし。その結果、100%歩くところまで回復するんやっていう、確信はどこにもなかったし。でも何もしなければ、お医者さんの言うとおりになってしまうんやろう。だから周平には明るい希望の面をで

きただけ伝えたいと思ったし、それが、よかったかどうかは、結果として、どんなに厳しいかを伝えな  
あかんかったのかな？っていう思いはあるけれども、  
その時はそういうことがプラスに働くとは思えな  
かったから」

自分がどのような状況に置かれているかも把握で  
きていない私に、二度と歩けないという「宣告」を  
し、顎で使う電動車いすとマウススティックを使う  
ことに慣れるための「リハビリ」を受けさせることは、  
決してプラスにならないと考えたためでした。

そして、その思いは医師の言う「専門的」なりハ  
ビリ施設を見に行っても、揺らぐことはありません  
でした。そこでおこなわれている「リハビリ」も残  
存機能を鍛えることで、いかに早く社会復帰を目指  
すかということに重点が置かれて、動かない部分  
に可能性を見出す「機能回復」とは全く違うもので  
した。本来であれば、受傷直後運ばれた、いわゆる  
「急性期」の病院を出た後は「専門的」なりハビリ  
がおこなわれる病院への転院を考えるもの。しかし、  
私の場合、障害の程度が重かったために、その「専  
門的」な病院に受け入れてもらうこともできません  
でした。また、私や両親もその様な病院に転院する  
ことに大きな意味を感じないということもありまし  
た。

S:「最初主治医から『3ヶ月後には専門的なりハビリの  
病院に』って話もあったけど、結果的に鍼の先生か  
らいい噂をきかへんかったってのもあったし。何よ  
り病院に連絡をとってみたら、『上腕二頭筋に反応が  
ないひとは受け入れられない』、結果的に受け入れ  
てもらえないと。最初入った病院以降の行き先とい  
うのは、行きたくなかったし、病院の方からも受け  
入れ拒否という形になって」

(中略)

T:「周平が一般病棟にいたころに、他の病院にもたくさ  
ん見に行ったしな。いろんなことを総合してみて、  
周平がリハビリの専門の病院に行ったとしても、行  
けないというのもあるけれど、そこで回復するとい  
うか、回復のためのリハビリであるとは思えなかつ  
た。残存機能を鍛えるっていう、いわゆる日本の病

院で。そのころ日本で一番進んでたと言われる、大  
分の病院でも最終的には残存機能を中心にやって  
感じやったし」

「医師から可能性はないって言われた。けど、や  
らないで後悔するよりは、ダメもとでも、今できる  
ことをやりたい」。その思いを支えてくれる人たちの  
存在も大きいものでした。一人は、前にも触れた、  
自転車事故で頸髄損傷となった女性とトレーニング  
に当たられていた男性の方である。事故直後につな  
がることができ、「実際に回復して歩いている人がい  
る」という事実は、「残存機能」を鍛えることを目的  
とした日本の現代医療と比べて非常に期待を寄せる  
ことができるものでした。そして、もう一人は同じ  
怪我から回復された方の紹介で来てくださるよう  
になった鍼灸の先生。事故後一ヶ月から、病室に  
来て治療をおこなってくださったこの先生は、一  
治療家としてではなく、一人の人間として、私や  
家族の「これから」に協力してくださいました。「  
君が諦めない限り僕はこれからは付き合う」とい  
う言葉には何ものにも代えがたい心強さを感じ  
ました。その後、病院を出て、家でリハビリを  
続けていくことを模索するようになっていきます。

T:「だから、在宅に賭けてみようよ、北海道の方  
のリハビリと鍼の先生の治療の2つに賭けて  
みよう、そのために家を改装するとか...それで、  
どこまで回復するかはわからへんかったけど、  
今の状態よりは悪くならへんやろうって」

H:「鍼の先生の話ではまずは3年。3年が5年、  
10年になってもあきらめずにがんばりたい  
っていう話はしてた。治療の経緯をみてい  
くなかで、周平は重症やってことはいうた  
から、歩くまでの回復はあかんのかなって  
のはどっかでちょっとずつ思わなあか  
んのはあったけど、何もせずにおいて、  
どんどん体がダメになっていくよりは...」

今の医療制度では、医療点数の関係でひとつの病  
院に入院していただける限界が、半年間とな  
っているため、3ヶ月を過ぎたあたりから  
転院を迫られていました。

S:「そういうのが続いたあとに一度、退院するという  
ことを踏まえて、日赤からすぐ退院するのは難しか  
ったし、とりあえず、洛西シミズに転院してから...」  
H:「とりあえず、日赤はそろそろ出てくださいという  
状態で5カ月いたから。難しかったというか、転院  
先としてリハビリ専門の病院っていうのは私らも望  
まなかったし、結果として、おいでとは言わなかつ  
た。在宅になるにあたって、日赤に主治医さんを持  
ったまま、在宅になるのは距離的にも心配やった。  
そやし地元で主治医を作りたいねって言うので。本  
来、急性期の病院から急性期への転院は、受け入れ  
る側からも困らるので、将来的にはリハビリ専門  
病院も考えなあかんのやけどっていう風な曖昧な感  
じでシミズには受け入れてもらった。なかなか受け  
入れ先が決まらへんから、しばらくはそこでって、  
シミズは受け入れてくれたと思うけど」

在宅に移るのであれば家の近くに主治医を見つけた  
という思いから、一度地元の病院に転院しました。  
そして、事故から半年が過ぎようとしていた2003  
年5月地元の病院も退院し、在宅の生活に移ること  
となりました。

## 2) 事故に対する温度差

事故から時間が経つにつれ「事故に遭った本人や  
家族」と「事故に関わった人たち」との間に、事故  
に対する気持ちの温度差を感じるようになっていき  
ました。

S:「家の近くに帰ろうってことになって、ただ、すぐ  
日赤から帰るが難しかったので、1ヶ月転院するって  
形で地元の洛西シミズ病院に首の専門の先生がおら  
れたので、そこに転院してそこから退院する手続き  
しよかって。そこに移ったのが4月の頭ぐらい」

I:「なるほど、なるほど」

S:「成章からもチャリンコで10分なんで...僕その頃、  
幼かったと思うんですけど友達が見舞いに来てくれ  
ると嬉しくて、なかなか会えへん友達やし、こんな  
け遠かった(第一日赤)のに来てくれて、洛西シ  
ミズやったらもう少しみんな来やすい環境になるん

かなって。監督らがなかなか来れずにはいったのも、  
こんだけ近くなったらちょっとぐらいは顔見せに  
来てくれはるかな、両親とも「最近、なかなか来て  
くれはらへんね」っていう不満ではないですけど、当  
初の気持ちからはちょっと離れてきてるかなって  
いうことを話してたところで。でも洛西シミズに移  
ってからさらに、連絡が途絶えるようになって、ホン  
マに週に1回来なくなって、月に1回、2回...顔  
を見たことがなかったですね。入院中の学校側との  
気持ちというのは、そんな感じですかね。睡眠導入  
剤も飲んでたりして、入院中の記憶が飛び飛びにな  
ってるのがあるんですけど。鮮明に覚えてるのは、最  
初はガッツリ関わってくれてはったのが、時間が経  
つにつれて少しずつ離れていったはるのかなって  
いう」

足が遠のいていくことに寂しさを感じていなか  
ったと言えば嘘になりますが、決して毎日顔を合わ  
すことを望んでいたわけではありませんでした。病  
院に来られないことで私の体の様子や、家族が抱  
えている悩みなどが共有されなくなっていくことを  
危惧していたのです。退院を見越して、家の近  
く(成章高校からも近い)の病院に移った後も監督  
やコーチが来られる頻度は少なくなっていくば  
かりでした。

その寂しさに拍車をかけたのが、監督が高校日  
本代表のコーチに選ばれたという話を本人から聞  
かされたときでした。

S:「許したってくれよって来てくれはったときにも  
う一つ言われたことがあって、JAPAN...高校日本  
代表のコーチに推薦されたから『俺、行ってくるわ』  
って言わはったんですよ。それって指導者にして  
みれば名誉なことかも知れませんが、実績が認め  
られたことやと思うんですけど、僕や家族から  
してみれば『えっこの時期に』っていう...まだ事  
故から3ヶ月も経たへんうちに、家族もいっばい  
いっばいのときにコーチの推薦受けてどこい  
かはるんですかっていう気持ちが」

I:「それはわからんでもないわな。(中略)これ  
に対しては、えーっと思ったわけやね。それは  
そうやな、こっちは大変やのに」

S:「自分のことも全くわからへんし、家族は悩んでるのに」

監督の口から「行ってくるわ」という言葉を伝えられたとき、私は「おめでとうございます」と言うことができませんでした。憤りや寂しさは一瞬のうちに通りすぎてしまい、ただ、そう言う他になかったのです。「僕はこんな状態で、家族も大変な毎日なのに事故はすでに過去のことなのか」と、込み上げてくるものがありました。

そして両親も、ラグビー部や学校関係者の足が徐々に遠のいていくことを直に感じていました。

S:「一般病棟に出てきてから監督や部長がだれか来てくれてはあったけど、なんか足が遠のいていくなっというのは母と話をした気がする。『今日は来はらへんかったね』という話が少しずつ増えていったような。忙しいのかなって」

H:「ラグビー部の首脳陣ではなくて、学校の先生方が交替で足を動かしてきてくれはったりとか、気功をやっているご夫妻が気をおくりに来てはったりとかあったやんか。毎日が2日にいっぺんになり、一週間にいっぺんになり、1ヶ月にいっぺんになりってみたい遠のき方はしていた。ある日(監督が)マネージャーしてた子と突然やってきて、『実は首の上に乗ったのは』っていう話をしに来たのは1ヶ月後くらいちゃうかな?ひとりでは来づらかったのかなって。なんでかなって」

S:「仕方なかったのかなって思う。ある意味、事故から1,2ヶ月立ってきたら、部活のことずっとほっとくわけいかへんし、担任もってたら、ずっと来るのは難しかったかもしれんけど...当時の心境としては『(こなくなるの)早いよな』事故のこと過去のことにするのは早い。まだ僕ベットの上ですけど...みたいな思いはあったな。

ラグビー部の関係者が来られないときは、高校の先生方が交替で足を運んでくれていましたが、それも次第に少なくなっていきました。

そして、監督が、コーチの推薦を受けたという話は両親にとっても、事故に対する感覚の違いを感じる出来事でした。

S:「監督がジャパンのコーチの話をしにいったときに、僕の中で境界線ではないけど、形として、気持ちが離れていく出来事やったと思うけど。その時二人共いなかったよね。(中略)それって思うことあった?両親の目から見て」

H:「そういうことは辞退はしないのね、学校がこんな大変な時に、一人の子ども的人生が変わってしまった大きな事態を抱えている時に、そういうのって受けちゃうやって。そういうのは家族で話していた気がする。やっぱり温度差というか...それはきっとあなたが同期生が卒業するときも、卒業する時の送別会で、監督やらコーチに手紙(自身の事故が過去のものになっているので考えなおしてほしいという内容)を渡したでしょう?そのあとに慌てふためいて、毎日のようにきた時があったやんか?そこで話している中で『周平のことを忘れていたのちゃう』『60分の1は周平のことと思ってラグビーをしていたんです』って言ったことがあったやんか。その感覚なんか。成章が認められて、少しでも強くなっていくために自分が力を蓄えることが、遠い意味ではあるけど、それは周平のため、あなたをいつか花園に連れて行くためっていう風にいえばそうなんやろうけどね。あなたの嫌いな体育会系の独特の理論というか。周平にそうすることが、きっと『僕のために』って周平が思ってくれたのとちがうかな。その時あなたが『おめでとうございます』っていうたのが、あんた大人やなって」

S:「とくにそれ以外にも考えられへんかったんやけど。それしか言えなかった。それが自分の中で覚えている、事故が過去のことなんかなって思ったという一つの出来事やったという」

「チームを少しでも強くして成章高校が少しでも認められることが、あの花園に連れて行ってやるのが、周平のため」と、考えるラグビー部の指導陣と、「少しでも息子や中村の家族に寄り添ってほしい」と、望んでいた家族との間に大きな感覚の違いが生まれ始めていました。